

中国の日本語教育における人間教育の導入について
The introduction to humanistic education
in the Japanese language teaching in China

王崗
深圳大学

要旨

近年、中国の日本語教育において、語学知識以外に、文化知識も導入する研究や実践活動が盛んに行われてきている。しかし、広義の文化に含まれるマナーや道徳という面での教育、すなわち人間教育が日本語教育の重要な課題だということが、現在でも教育関係者の間で十分に認識されていない。そのため、従来、人間教育に関わる研究や実践活動がそれほど多くはみられなかったのだと考えられる。これとは対照的に、今日の中国では、ほかの多くの国に比べ、社会全体にマナー意識がまだ十分浸透していないこともあり、国民全体の素養も依然として低水準のままである。このような現実的な問題があることから、学生を含む多くの人たちへの教養や素養の教育指導が急務となっている。そこで、本稿は、日本語教育の現場で実際取り組んだ実践活動をもとに、人間教育のありかたの可能性についての模索と考察を行う。

キーワード：

日本語教育、人間教育、マナー、導入、指導

1. はじめに

外国語の指導目標の一つに、言語と文化の理解がある。つまり、当該外国語の言語学的な知識理解に加え、文化理解には自己・自文化を含む他者・他文化の理解が含まれる（加賀田 2009, p.477 参照）。しかし、今から十数年前までの中国においては、日本語を含む外国語の教育は、どちらかといえば、言語学的な知識理解に偏重しており、文化的な理解に対してはそれほど重視されていなかったように思われる。こういった教育傾向への反省から、文化要素を外国語教育に導入する研究や実践活動が、近年、中国で盛んに行われてきている。例えば、英語やフランス語の教育については、趙（2009）や王・劉（2016）があり、日本語の教育においても徐（2004）や王（2010）などの研究がある。これらの研究は、様々な角度から、英語、フランス語、日本語などの語学教育において、当該言語に関わる諸文化要素の導入や教授が不可欠だと力説している。確かに、外国語教育では、「聞く、話す、読む、書く」という四技能の学習と指導がむろん必要かつ重要なことである。しかし、それだけではグローバル時代で生きている今日の学習者の多様なニーズに対応できるとはなかなか言えない。従って、実際の教育現場では、技能などのリテラシーの教授以外に、多種多様な文化知識の導入や紹介などが、学生たちの学習意欲の向上や人間成長に大いに役立つことになると思われる。

ただ、従来外国語教育における文化導入論の諸考察を見比べると、その多くは、目標言語が使われている国の民族文化の学習や異文化コミュニケーションなどに集中しているようだが、学生個人の成長や礼儀意識の養成など人間教育的な考察がまだ不十分なように見える。では、なぜそういった研究があまりされていないのだろうか。その要因は、外国語教育の究極的な目的が、学習言語で相手国の民衆との交流が支障なく行われるところにあるため、学生個人の人間成長や礼儀・マナー意識の育成などが教育指導の最初から度外視されることにあるのではないかと考えられる。また、中国の大学で開設されている人間教育的なコースは一般的に、教育・心理学科の教育課程や一般教養課程（徐 2009 参照）に編成されているため、外国語教育とは基本的に無縁なような存在になっている、という要因もあると考えられる。しかしながら、外国語の教育であっても、教育である以上、学生たちの人格、素養の育成などを含む人間教育という重要な教育使命を果たすべきところがあると思われる。

一方、今日の中国（本土）は、経済の高度成長で社会の隅々まで日々変貌しつつあり、目を見張るほどの発展の流れに飲み込まれ、利欲やマネー至上主義の風潮に煽られた結果、ごく普通で常識ともいえる素養に欠けている人も確かに大勢生み出されている。その意味では、外国語教育を含む学校教育、大学教育は、国の将来を担う若者たちに語学や文化の知識などを伝授する一方、可能な範囲で学生たちの人格の育成にも力を入れるべきである。以下、主に中国における日本語教育を通じて、学習者の礼儀やマナーなど人間教育の課題に焦点をあてて分析を試みる。

2. 人間教育とは

前述したように、学生たちへの人間教育は、中国の外国語教育の責務であると思われる。しかし、人間教育といっても、その概念や中身は、必ずしも一定ではない部分があるため、その議論に入る前に、そもそも人間教育とは何かということをもまず明確にしなければならない。

人間教育とは、文字通りに、人間の成長、人間としてのありかたに対して行う教育のことであるが、定義において研究者による捉え方の差がある。

日本における人間教育研究の第一人者だと言われる梶田は、「人間教育というのは、一人ひとりが深く自分の人生を生きていけるように教育していくことです。別の言葉で言うと、自分自身の固有の世界を大事にしながら、自分として本当に満足のいく毎日を送っていけるようにするということです。」¹と指摘している。また、梶田（2014）は、「「人間教育」という言葉は、教育によって何を実現するかという教育目標にかかわる面と、教育活動やカリキュラム、制度等といった教育の具体的なありかたに関する面との2つの面を持つ」（p.3）としたうえ、教育目標としての人間教育は、「人間としての高次の成長・発達こそ教育の本来目指すところである」（p.3）と述べている。さらに、梶田（2014）は、人間的な教育のありかたについて、「教育がどのように崇高な目標を掲げて行われようと、その具体的な過程が非人間的な面を含むものであるなら、こうした面もまた根本的に是正されていかななくてはならない。(略)「人間教育」は、現実の教育の過程を人間的なものにしていこうとする取り組みでもあり、教育の方法について、教育的な関係や教育の場の雰囲気について、抜本的に考えていかななくてはならない。」（p.4）とも指摘している。つまるところ、梶田が主張している人間教育とは、人間の自己成長が実現でき、そのための過程も人間的なものでなければならない、という教育のことだと考えられる。

¹ 「www.sky-school-ict.net>...>学習指導要領／教育の情報」を参照。（2017年10月15日）

Moskowitz は、「人間教育」ではなく、「人間主義教育」という言葉を使っているが、両者の間にかなり通じるところがある。Moskowitz は、人間主義教育というのは、「学習者の人格的発達、自己受容、他者受容と関わり、学習者をより人間的にならしめることを課題とし、それは、知的領域と感情領域からの全人教育を意味している。また、教育内容には学習者の感情、体験、記憶、希望、切望、信念、価値、空想を関連づけ、自己発見、自己内省、自尊感情を視野に入れながら、自他の長所や肯定的な資質を関わらせることで、人間主義教育の究極の目的としての学習者の自己実現を支援することにある」(加賀田 2009、p.471)と捉えている。すなわち、Moskowitz による「人間主義教育」には、学習者たちへの知的教育と情意的な教育が盛り込まれるということがいえる。

また、柴原ほか(2015)では、人間教育への明確な解説は特に行っていないものの、「言語学習は、言葉の習得のみならず、人間的成長を視野に入れる必要がある」(p.155)と主張したうえで、人間的成長すなわち人間教育を目的とした研修設計の試みをしている。ここからは、柴原などが人間教育を人間的成長と捉えていることがわかる。

一方、中国では、人間教育ではなく、これにほぼ近い「人文教育」(Humanistic Education)という名で、学生たちの人間成長や人文素養の育成に関する研究を進めることが多いが、学者によってその理解が様々である。しかし、中心的な概念や理念において、基本的に次のような点が共通している。つまり、「人文教育」とは、教育を受ける人たちに、人格達成のほかに、豊かな想像力と創造力、高尚な情操、健全な価値観、良好な教養、個人、家庭及び国、社会への責任意識をもつように教育していくことである(敖 2011、魏 2017 参照)。

ここまで述べてきたように、人間教育だと一言で言っても、その定義が学者の間でまだ統一されていないのだが、全体的には、「人間成長や人格育成への教育」、という要素が不可欠だということがわかる。しかしながら、中国の大学における日本語など外国語の教育においては、授業進度やシラバスなどによる制限が多いため、人間教育に関する多方向、多角度からのアプローチが基本的に難しい。従って、本稿で検討する人間教育は、一教養人として成長するために必要な礼儀・マナーの教育に集中し、そこから中国の日本語教育における人間教育のありかたを検討する。

3. 中国の日本語教育における従来のあるかた

中国における日本語教育は、英語教育と同じく、伝統的な「文法訳読教授法」や

「オーディオ・リンガル教授法」²を深く反省したうえで、「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」など様々な新しいアプローチが試みられている。例えば、呂（2006）は、学生を授業時の中心的な存在と位置づけ、マルチメディアやインターネット環境下の対人交流アプリケーションを授業の展開に生かし、学生たちのコミュニケーション能力を向上させるという新しいモデルの日本語教育の道を探求すべきだと指摘している。また、魏（2011）は、日本語の歌を教育現場に活用し、受講生たちに、歌詞の翻訳、理解、背景解説などをさせたりするという個性的な教授法を打ち出している。これらに比べ、王（2009）の研究は、中国の日本語教育においてかなり異色なものだと考えられる。王（2009）の研究では、日本人の環境保護の理念や意識を日本語教育に浸透させることで、受講生たちに、日本語の勉強を楽しませながら、エコ意識を養成することになると指摘している。

一方、日本語の教育活動には日本の社会的、文化的、民族的な特徴や知識も取り入れるという議論も模索も現在まで続いている。例えば、王（2010）は、日本語教育において学習者たちの文化的な素養を涵養するようにすべきだとしたうえで、日本語教育の目標は、日本語知識の教授のみならず、中日文化交流の懸け橋になり、その担い手にもなるものだと主張している。そこで、日本語科の学生たちに、日本語以外に、日本の祝祭日、歴史、風俗習慣及び茶道、歌舞伎といった文化的リテラシーを学習する必要があると指摘している。王（2010）のほかに、徐（2004）、周（2016）、楊（2017）なども同様の研究を行っている。

ここ十数年来、異文化コミュニケーション能力の育成や人文的素養教育を取り扱う研究は、中国の日本語教育分野でも確かにみられるようになってきている。しかし、そのような研究や実践活動は、教授法または教育方法の一般論で終わるものが多く、学習者たちへの人間的な教育研究やその模索は、まだまだ十分だとは言えない。

4. 中国の日本語教育における人間教育導入の必要性

周知のとおり、中国では、今日でも依然として衰える兆しもなく史上最大の改革が押し進められている。このようなすさまじい変革と、それに伴う激しい生存競争に直面している中国の人々は、逃げ場もなく様々な対応に追われることになっている。その中で、自己利益の追及や金銭至上主義の風潮が知らずのうち

² 「文法訳読式教授法」とは、文法を演繹的に提示・説明し、外国語を母語に、また母語を外国語に翻訳する過程を通じて言語習得を目指す方法であり、音声面の学習や言語運用能力を育成するには不慣れな教授法である。一方、「オーディオ・リンガル教授法」とは、「聞く、話す」を重視し、学習者に聞いた音や例文の模倣を繰り返させる教授法であるが、学習者の創造的・認知的可能性が無視される。

に社会の隅々まで蔓延してきている。また、それらの風潮は、結局、エゴイズム、自己喪失、伝統道德の崩壊という改革の副産物や社会的な、人間的な信頼危機を招いている。これについては、これまで数多くの議論とケース分析がなされている。

方・査（2015）は、大学キャンパスの公共の場における、学生たちのマナー意識や個人素養の欠乏を取り上げ、その要因に対する分析及び解決策を論じている。方・査（2015）によると、学生たちの問題行為としては、図書館自習室での私語や図書の小声での音読、学生寮でのわがままな振る舞い、並んでいる行列の割り込みなどがあげられ、自律力の不足によるものとしては教室や図書室での携帯電話のマナーモード未設定や、授業の無断欠席などがあげられる。そのための解決策として、単なる top-down 的な説教ではなく、現実社会に密着している教育を学生たちに実施したり、カナダやアメリカの大学のように、多方面にわたるキャンパス文化の浸透など示唆的な教育を生かす方法が考えられる。このほかに、学生たちに公民教育をしたり、教員が自ら模範を示したりすることも重要な一策になると指摘している。

陳・陳（2017）では、中国安徽省の省都合肥市の市民の交通マナーに関する現場調査の報告と分析が行われている。その調査は、2016年9月に、主に合肥市の幹線道路の交差路での市民の通行行為に対して実施され、その結果が以下の表にまとめられている（筆者による省略と調整がある。なお、訳も筆者）。

表1 調査の過程と結果

交差路 (名称略)	時間帯	観察対象数	赤無視者数
1	9:00-10:00	316人	88人
2	11:00-12:00	325人	107人
3	16:00-17:00	406人	0人
4	10:30-11:30	332人	125人

(注：当論文の p.40 より引用)

表によると、交差路の「1、2、4」ではいずれも30%前後の交通信号無視者が観察されたが、「3」では「0」人という結果は、歩道橋設置のうえに警察が常時巡回するためであろうと表の備考欄と後述の分析に記されている。簡単な集計表ではあるが、市民の交通素養の低さが多少とも浮き彫りになっている。合肥市のそのような交通事情からは、程度の差こそあれ、中国全土の交通マナーの欠乏が垣間見えるだろう。

上述のような、国民素養や教養の低下といった難局を打破するために、ここ十数年来、中国の政府機関、各自治体および有識者たちは、すでに互いに協力し、各種積極的な行動を実行し始めている。例えば、赤信号無視の横断通行者に罰金や警告をしたり、他人救助で怪我した者への救助基金の設立などがある。

しかし、国民素養の大幅な改善と向上は、想像するよりはるかに難しいことであり、まだ長い道を歩まなくてはならない。その過程では、国の未来を担う若者たちへの人間道徳教育には、次世代の社会環境の浄化をもたらす大きな可能性をばらむ。従って、外国語教育を含む中国の教育学界では、礼儀中国の復活や良質社会への回帰を果たすために、より一層の情熱をもって若者たちへの教育指導に取り組むべきである。

中国における日本語教育者たちも、むろん、そのような事業に参入する必要がある。さらに、英語などに比べ、日本語の学習と教育は、学生たちの素養力アップの大きな励みになるばかりではなく、その効果もより期待できる。というのは、以下のことが考えられるからである。

今日の世界では、日本ほどマナーや礼儀を重んじる国は多くはないだろう。それにも増して、中国ではすでに早くより失われていたり衰えていたりする一部の優良な伝統と礼儀が、日本人によって受け継がれてきている。そこで、日本語の学習を通して、中国の若者たちに、古来の中国と現在の日本でともに認められる健全な人格、品格素養を少しずつ再認識、再発見させることで、高尚なる道徳心とマナー意識の再建が十分可能になると考えられる。

5. 中国の日本語教育における人間教育のアプローチ

外国語教育は、独自の教授法、指針及び教育のルールと基準をもっているため、一般的な教育課程や一般教養課程で触れられる道徳、情操、美徳の教育などに比べ、かなり違うところがあると思われる。その一つとして、毎回の授業で最初から最後まで人間成長や道徳の講義などに集中するわけにはいかないということがあげられる。この理由の一つは、外国語の教育では、「話す」「聞く」といった技能の習得が依然として最重要な位置を占めているということにある。従って、外国語の教育に人間教育を盛り込むにあたり、教育者は様々な試みと工夫を凝らさなくてはならない。日本語教育にも全く同様のことがいえる。

筆者は、深圳大学で、日本語を専攻にしている三年次生と四年次生の『総合日本語』（『精読』）をそれぞれ担当したことがあるが、授業中、該当講義における日本の言語、文化、歴史、民俗などの知識を教授する一方、意識的にマナーや道徳育成に関わる話題にも適宜触れるようにしていた。そして、その話題は、

食卓マナーや受講の行為など、ほとんど学生たちの日常生活や現実世界に直結するようなものに集中している。なお、質疑応答を含めた指導時間は、肝心な授業進度を妨害しないために、大体5分間から最長15分間以内としている。一連のアプローチは、多彩かつ柔軟な教育指導によって、学生たちの礼儀、教養面での知識を可能なかぎり増やすようにするための取り組みである。以下、深圳大学での、筆者による試みを例に紹介する。

5.1 食卓マナーの話

中国の大学生たちの多くが、大学の学生食堂で一日三食の食事をとる。しかし、その食堂の飲食風景はどうだろうか。そこに一度でも足を運んだことがある人は、だれでも同感だろうと考えるが、食卓上の食べかすや椅子の散乱に思わず眉をひそめたことがあるだろう。

そこで、授業中食事や料理について話題を展開するとき、テーブルマナーの話の次のように持ち出すようにした。

質問：各地のグルメを写真で堪能したのだが、深圳大学の食堂とその料理を話し合おう。では、質問：1) 食堂風景はどう思う？ 2) 気持ちよくものを食べられる？ 3) 快適な飲食環境だと思う？

回答：うるさい。汚ない。列が長い。料理がまずい。

解説：確かにそのとおりだ。しかし、先生が注目しているのは、食卓上の食べかすと椅子の散乱などだ。学生食堂は、固定椅子に金属製カバーのテーブル、そして清掃員による常時清掃があるので、まだ少し清潔さを維持している。これに比べ、教職員食堂では、教職員のための昼食タイムにしても、学生利用可能な夕食タイムにしても、整然とした食前とは裏腹に、食後の様子は、とにかく、汚く乱雑だ。食べかすを前にだれも食欲がそそられないであろうし、椅子が散乱して通行の邪魔になる。これらはどう見てもよいとは言えない飲食環境だろう。一方で、少なくとも日本や香港の大学食堂では、基本的にそのような風景は見られない。特に日本の大学食堂は、食前でも食後でも、椅子の配列が変わらず整っており、食べかすもゴミもほとんどない。日本でごく一般的な食卓のマナーや常識を、中国の大学の教員と学生が知らないか、認識していないため、上記のような乱雑さなどが生み出されているのだろう。このことから、日本の大学で見かける先生や学生の食事マナーは、深圳大学の教員、学生に本当に習ってほしい。そうすると、将来は、どこにいても、ばかにされない礼儀正しい教養人として活躍できることになる。本日、せっかくこういう話をしたので、今後、自分の身につく悪い癖を捨て、よりよい食習慣を身につけるように努力しよう。

筆者は、上記のようなやりとりを通して、独自に食卓マナーに関する人間教育的な実践にとりかかってきた。その効果はすべての学生からは確認ができなかったが、学生数人のその後の飲食の様子を観察したところ、食後に椅子をもとに戻す振る舞いなどが確かめられた³。

5.2 受講行為の話

教室で授業をするときに、学生たちの、携帯電話の確認、耳打ち、居眠りなど様々な行為が観察できる。中で、礼儀意識の有無に関わる振る舞いもみられる。例えば、あくびをすることなどである。

授業の進行中、疲労や退屈から、学生たちが思わず大あくびをすることがある。それはそれで別に不思議なことでも何でも無い仕草だが、気になるのは、女子学生でも男子学生でも、ほとんど口を大きく開けて、傍若無人な恰好であくびをするということである。少人数の教室だけに、そういう大口がひと際目立ち、教壇からはっきり目に見える。そこで、それらの行為を目にした際、都合により、授業を一時休止し、冗談半分で、あくびをした子に、どうしてあくびをしたのか、日本語による理由説明を求める。それを聞き終わると、手本を披露しながら、あくびを比較的上品にする方法やコツを教える。つまり、手で口を覆うようにすることである。もう一つは、本などで顔を隠すようにすることである。それらより更によいのは、実際あくびをしているが、なるべく見せないように控えることだ。こうすると、少しでも紳士や淑女のような姿で、あくびすることができる。

うれしいことに、こういう話を数回した結果、クラスでは徐々に大口あくびが減ってきた。

5.3 車内マナーの話

『総合日本語』の教材には、日本私鉄協会が 2010 年 3 月に実施した「電車内の気になる迷惑行為」という調査の結果が掲載されている。それによると、電車内で気になることの第 1 位は「大声での会話」で約 1/3 を占め、第 2 位は「ヘッドホンの音漏れ」であるということである⁴。これに関連して、中国の地下鉄や電車内における迷惑行為を学生たちにまとめてもらった。

³ この結果は厳密な調査データによるものではないため、まだ議論すべき点があるが、深圳大学日本語科の学部生、大学院生たちが、会場や食堂で利用した椅子をもとに戻さない行為が依然として頻発しているところから、筆者による当該人間教育的な指導には一定の効果があるといえよう。

⁴ 『基礎日語 総合教程 4』（趙編（2011）、高等教育出版社）p.121 による。

その結果、学生たちが口をそろえて報告したのは、「大声での会話」、「子供の暴れ」、「携帯電話によるゲーム遊び、テレビドラマ放映の音がうるさい」などがあげられた。そこで、学生たちに、中国人の乗車マナーについていろいろ討論させた。そして最後の総括として、指導にあたっている筆者は、「日本人にしても中国人にしても、みんなにいやがられる電車内での非常識な行為は、新時代の大学生として、今後なるべく控えるようにすべきだ。そして、将来自分の子供にもきちんと教育をし、電車など公共の場での礼儀やマナーを守るように育ててほしい」と、締めくくった。

このような話は、実際の教育現場でしているため、授業の面白さを増すだけではなく、学生たちの人間成長にも役立つものだと考えている。実際に、その後は、学生たちとは数回にわたって連れ立って地下鉄や電車を利用したことがあるが、小声でおしゃべりをしたり、優先席に座らなかつたりする行為が印象深かった⁵。

6. おわりに

グローバル時代では人的交流がかつて以上に活発化し、地球規模のネットワークが広がっていくにつれ、価値観や道德意識を共有できるような異文化コミュニケーション能力がますます必要になってくる。このことから、日本語を含む外国語教育において、語学と文化的な知識の両方に触れるアプローチがすでに当たり前のように捉えられてきている。しかし、現実的には、以上で論じたように、その重要な一環に位置付けられるべき人間教育的な内容の導入がまだ十分になされていないと言わざるを得ない。特に、激変と激動している現代中国では、そういった人格、道德教育が他国以上に重要視されるべきである。

本稿は、そういった不十分な教育現実に直面しつつ、独自の教育の模索と考察を行ったものである。ただ、その試みは、これまでのように形式ばった検証風な論述方法を排除し、一緒に人間教育のあれこれを考えようという形で展開した。その代りにいくらか思い届かないところが生じてしまったらどうかと思われるが、今後より充実した教育活動の参考と、中国の日本語教育における人間教育の本格的な開花を期待しつつ、本稿の結びとする。

補記

本稿は、深圳大学“2016年度深圳大学教学研究改革項目”（課題番号：JG2016027）の研究助成を受けている。なお、本稿の作成にあたり、査読者より貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

⁵ この結果は、学生たちの内発的な行為なのか、指導による行為なのか、それとも教員同行で意識された行為なのか、現時点ですでに確認不能だったので、今後更なる観察が必要であろう。

参考文献

- 王琦（2009）「高校日語教学中的環保教育」『天津市經理学院学報』（4月）,50-51
- 王松・劉長遠（2016）「外語學習者的跨文化意識培養」『外語学刊』（5）,127-131
- 王玲（2010）「關於日語教学与提高学生文化素質的思考」『西南民族大学学報 2010 年外国語言文学与文化』（人文社会科学版）,84-86
- 加賀田哲也（2009）「人間学的英語教育の概念構築への一考察」『大阪商業大学論集』5（1）,467-479
- 梶田叡一（2014）「人間教育」とは何か — 人間教育学の建設のために — 『人間教育学研究』（1）,1-6
- 魏飴（2017）「高校人文教育与文科專業轉型發展七評」『中国大学教学』（1）, 36-40
- 魏鳳麟（2011）「日語歌曲在日語教学中的靈活運用」『長春理工大学学報』（11）,156-157
- 敖村村（2011）「高校外語教育与人文教育」『中国成人教育』（4）, 24-25
- 柴原智代、末永サンドラ輝美、吉川一甲真由美エジナ（2015）「日本語学習を通して行う人間教育の試み—サンパウロ日本文化センターの生徒研修—」『国際交流基金日本語教育紀要』第11号,155-161
- 周麗玫（2016）「跨文化交際背景下日語教学中文化因素的導入」『教育教学論壇』（7）,110-111
- 徐燦（2004）「論中日文化差異与日語教学中的文化滲透」『重慶大学学報（社会科学版）』（6）,130-132
- 徐亜妮（2009）「基礎教育中不容忽视禮儀素養教育」『蘭州学刊』（8）,158-161
- 趙華敏編（2011）『基礎日語 総合教程4』高等教育出版社
- 趙陽（2009）「从文化比較看文化因素在外語教学中的引入」『外国語文』（10月）,121-123
- 陳麗・陳松林（2017）「合肥市民交通文明素養問題与对策研究」『中共合肥市委党校学報』（1）, 39-43
- 方黎・查偉（2015）「大学生校園公共空間文明素養缺失的文化考量」『高校輔導員学刊』（10月）,87-92
- 楊清玉（2017）「日語教学中的文化導入」『学週刊』（7月）, 6-8
- 呂興師（2006）「日語教学新模式的探索」『中国成人教育』（1）, 140-141